

---

# パラダイス・ロスト

聖夜竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パラダイス・ロスト

### 【Nコード】

N3136Y

### 【作者名】

聖夜竜

### 【あらすじ】

様々な世界の者達が絶海の無人島に招かれる。しかしそこは、結界によって現実から隔離された閉鎖空間だった。封印された力、次々と発見される不可解な謎、そして仲間内での対立。次から次へと事件が起こるこの島で、集まった25人の少年少女は『楽園』と呼ばれる孤島に隠された謎を解く為に奔走する。その中で明らかになっていく事の真相、徐々に崩壊を始める孤島。彼らは無事に無人島サバイバルを乗り越え、元の世界へ帰れるのか！？

## プロローグ〈辿り着いた先〉（前書き）

今回は多作品によるクロスオーバー二次小説です。

見切り発車なので今後どうなるかは作者にも分かりませんが、暇潰し程度に見てくれると幸いです。

## プロローグ 辿り着いた先

あらかじめ言っておく。

いつも通り手早くメシを済ませ、外へ出た。

山風に凍り付くような12月18日。

今日も順調に寒い。

そしてこの日を境に俺の生活は一変する事になる。

それは俺にはちっとも笑えない事だった訳で。

「くそっ……何だ？ 暑い……まるで夏だ」

あまりの暑さで目が覚めた時、キヨンは何処かの海岸に倒れていた。

真夏の太陽がサンサンと降り注ぐ中、北高の冬用制服の上にコートという、まるで我慢大会にでも参加しに来たのかと思うほど、あまりに場違いなキヨン。

汗だくになったキヨンはとりあえずコートを脱ぎ捨てると、海岸一帯を見渡してみる。

「……無人島、か？」

奇妙なことに、キヨンのいる島は夏休みにSOS団で行った絶海の孤島に似ていた。

「……ッ!? ハルヒ!!!」

とその時、同じく北高の冬用制服を着た少女、涼宮ハルヒが砂浜に倒れているのを発見した。

「つまりあたし達は、クリスマスの一週間前から夏休みに時間が戻っちゃったって訳？」

「いや、俺にも何が何だか……」

バツが悪そうに答えつつ、内心考えてみる。

(もしそうだとすれば長門の仕業か……? いや、長門はこんなやり方はしない)

キヨンが色々と思いを巡らせている間、ハルヒは無人島をキヨロキヨロと興味深けに見渡していた。

(って事は、またハルヒの仕業か……)

また厄介な事に巻き込まれたなと思いつつ、キヨンはトボトボとした足取りでハルヒの傍に歩みながら溜息を漏らす。

「キヨン。とりあえず、あの森の奥に行くわよ。館があるかもしれないわ」

ハルヒの指差した先には薄暗い森が続いており、まるでキヨンとハルヒの来訪を歓迎しているかのようだ。

「館？ おいおいハルヒ。さすがにこの島に館はないだろ。どう見てもただの無人島だ」

「いいえ、きつとあるわ！ さっきからそんな気がするのよ！」

(……………どういうことだ？)

元気よく進み出すハルヒの後を慌てて追い掛けたら、キヨンはふと疑問に思った。

その頃、キヨンとハルヒが倒れていた海岸から少し離れた場所に位置する岩場では、同じように無人島にやって来た二人がいた。

波の音が聞こえる……

「どうよ、いい……」

青髪の可愛らしい女の子、古手梨花は目の前に広がる海を眺め、ポツリ呟いた。

「参ったわね……こんなイレギュラー、百年の中で初めて見たわ」

目に映る景色は生まれ住んでいた雛見沢ではない。

それどころか、ここが日本なのかも疑いたくなる。

確かに、梨花が変わり映えのしない日常に飽きていたのは否定できない事実。

だからといって、これは非日常どころの話じゃない。

まさか、サイコロを何度も振る権利すらも奪われてしまうとは思ってもみなかったのだ。

運命のサイコロを振り、そのまま勢いのあまり遙か彼方へと飛んで行ってしまったかのような悪夢。

何よりも不安なのは、目に映る景色が雛見沢ではない事。

知らない場所で目覚めた事が、梨花の不安を増長させていた。

何しろ、こんな事は今までの人生で一度も無かった。

とにかく、まずは羽入を呼び出すのが先決だ。

「羽入！ どこにいるの？ 聞こえてる！？ 羽入っ！！」

その場に立ち尽くしながら周囲を見渡す。

梨花は必死に呼び掛けるが、羽入からの返事はない。

それどころか、羽入の気配すらも感じない。

「そんな……」

梨花はその場に崩れ落ちる。

こうして、古手梨花の物語は絶望から始まった。

ユニオン軍<sup>エムスワット</sup>MSWA所属のエースパイロットにして優秀なフラッグファイターであるグラハム・エーカー。

彼は何故か直前までに着ていたパイロットスーツではなく、黒い私服という出で立ちで海岸沿いの岩場の上に立って海を眺めていた。

その瞳の奥底には、今までの戦いの記憶が鮮明に刻まれている。

二人の亡き同胞との約束を胸に誓い、親友のビリー・カタギリがグラハムの我が侘を聞いて短時間で作り上げてくれたMS『ユニオン

フラッグカスタム』を駆り、ソレスタルビーイングの刹那・F・セイエイが駆る『ガンダムエクシア』との激しい戦いの果てに相討ちとなった。

相討ちという形になってしまったが、グラハムは満足感に満ち足りていた。

ようやく、あのガンダムを打ち倒す事が出来た。

ハワードとダリル、そしてエイフマン教授の仇を討ったのだ。

せつかくのフラッグカスタムを壊してしまい、カタギリには悪い事をしたと思っている。

もしもまたカタギリと会えるのなら、その時に謝ろう……

……そこまで考え、グラハムの意識は途絶えた。

次にグラハムが目覚めた時、そこは死後の世界とは明らかに違う、見知らぬ無人島だった。

そして、現在に至る。

グラハムはまだこの状況に慣れてはいなかったが、とりあえず海を眺めて落ち着く事はできた。

そして次にどうするか考えていると、ふと人の気配を感じ取る。

「……そこに隠れているのは誰かな？ 出て来たまえ」

グラハムが岩に向かってそう告げると、青髪の女の子がゆっくりと姿を見せた。

「君は……？」

「……古手梨花なのです。あなたは誰なのですか？」

「失礼。私はグラハム・エーカー。軍服は着ていないが、軍人だ」

こうして、梨花とグラハムは無人島にて出会った。

「……なるほど。君も気付いたらこの無人島にいたという訳か」

「みい……起きたら知らない場所にいたので、ビックリなのですよ」

梨花から詳しい話を聞き、情報を頭の中で整理するグラハム。

その隣では、梨花が難しい表情で思考を巡らせていた。

(知らない……私はこんな男、知らない……!!)

自分の全く知らない人物。

梨花にとってグラハムという存在は、ある意味で圭一以上のイレギュラーだ。

果たして、今までにないこのイレギュラーな世界で梨花は生き残れるのか？

それは、『運命』のみが知っている

プロローグ〈辿り着いた先〉（後書き）

とりあえず、プロローグ。

実はこの小説、作者の好きなキャラたちがこんな風に会話をしたら  
……

という、下らないコンセプトで出来ています。

なのでストーリーはあくまで二の次だったり……（えっ

## 1話『森での遭遇』（前書き）

今回のあらすじ

皆殺し編の世界で死んだ前原圭一。

彼が目覚めると、そこは見知らぬ場所だった!?

そこで圭一はマフィアの赤ん坊や某国のお姫様と出会い、現実離れた世界に足を踏み入れていく事に。

一方、行方不明になったリボーンを探して飛ばされてしまったツナこと沢田綱吉。

途方に暮れるツナの前にも敵が現れ      !?

## 1話『森での遭遇』

夜の帳も降りし森の奥。

6人の少年少女は月下に照らされ、そこにいた。

「け、圭一……その胸の前に浮いてるのは、なんですか……?」

「何ってなんだよ?」

そう言いつつ、圭一は視線を下に向ける。

「は? これ……なんだよ……?」

圭一の胸元には、一発の銃弾が真っ直ぐ向けられていた。

「け……圭ちゃん、なんとか体を捻って銃弾をかわせないんですか!?」

「バカ! ムチャ言うなよ! 全部が止まってんだ! 俺だけ動ける訳ないだろ!」

「なら時間が動き出すのと同時に上半身を反らせば……」

「15cmしか離れてないんだぜ。無理だ」

そう……この状況から圭一を救う方法など、皆無に等しい。

「もうさ、こうなっちまったものは仕方ないさ。時間が動き出せば俺は死ぬ。だからみんな……今のうちに俺を諦める」

それを知ってか、圭一はただ笑って諦めるしか他に道は残されてないかと悟る。

「俺が死んでも……みんなは生き延びろよ！ 絶対だ！」

そして、残されたみんなに想いを託すことしか……

「……梨花ちゃん。最後の最後にごめんな。運命なんて覆せるって大見得切ったのに、最初にリタイアしちまう」

……そして、前原圭一の人生は終わりを告げた。

……はず、だったのだが。

「ここは……？」

圭一が目を覚ました時、辺りは既に静まり返り、時間帯も夜ではなく朝になっていた。

しかし、その森は圭一が死ぬ直前までにいた場所とは違っていた。

「ッ！ 梨花ちゃん！！ みんな！」

そこでようやく、圭一の記憶が蘇る。

鷹野率いる山狗部隊に追われる梨花ちゃんを助ける為に、仲間たちと共に裏山に逃げ込み、そこで鷹野と対峙した。

しかし……

「そうか……俺は死んだのか……」

圭一は涙を堪えるように顔を下に向け、すうーと息を吸い込む。

「ちくしょおおおお!!」

森全体に響き渡るくらい大きな声で圭一は泣き叫ぶ。

仲間たちと最後まで一緒にいられなかった悔しさ。

諦めるという選択を選んだ無力な自分。

それら全ての感情が爆発し、圭一の中で弾け飛んだ。

「きゃっ!?!」

するとその近くで、少女の驚きに満ちた声が聞こえてきた。

「だ、誰だ……!?!」

……もしかして、みんなかもしれない。

淡い期待を胸に抱き、圭一は声のした茂みの中に飛び込んだ。

圭一の視界に一瞬入ったのは、見た事もない白い服を着たピンク色の髪の少女。

そして次の瞬間、圭一の視界は反転する。

「えっ………？ うわっ！」

気が付くと圭一は、何者かによって無理矢理地面に倒されていた。

「動くな」

そして背後から拳銃のようなものを首筋に突き付けられる。

「だ、誰だよ！？ まさか………山狗、なのか………？」

「山狗？ そんなの知らねーぞ」

可愛らしい声がしたと共に、圭一の首筋から拳銃の銃口が離れる。

圭一が恐る恐る背後を振り返ると、そこには……

「ちやおっす。オレは家庭教師ヒットマン、リボーン」

黒いマフィアスーツ姿の赤ん坊が拳銃を片手に立っていた。

「なっ………！？ あ、赤ん坊！？」

圭一はまたもや驚いた声で叫ぶのだった。

「なるほどな。死んだと思ったらここにいたってワケか」

「ですが、そんなことが本当に起こるんでしょうか？」

現在、圭一はリボン、そしてリボンと一緒にいた少女、エステリーゼ・シデス・ヒュラツセインと自己紹介と簡単な情報交換を交わしていた。

「ありえねー話じゃねえかもな。オレも10年バズーカで10年後に飛ばされたはずが、こうしてここにいるワケだしな」

「正直、訳が分からねえぜ……」

マフィアや10年バズーカなど、リボンから聞いた話も圭一には理解し難いものだった。

それでも圭一が二人の事を信じたのは、先ほどまでいた皆殺し編の世界で梨花から信じられない話を聞いていたからだろう。

確かに現実味のない話ではあるが、難見沢症候群や東京の存在など、圭一の周りにも有り得ない話があった。

何より臨死体験した圭一が今こうして見ず知らずの森に飛ばされてしまっている。

この時から既に、圭一は有り得ない世界に入り込んでいるのだ。

「これからどうするんです？」

エステリーゼことエステルが、圭一とリボーンに尋ねる。

「まずはここが何処なのかを知るのが先決だ。ひよっとしたら俺達他にも誰か人がいるかもしれない。そのついでに食料や水が手に入ればいいんだが……」

「頭はそれなりに良いみてーだな」

そう言っつて、リボーンはニツと笑う。

「オレの見た感じ、ここは日本じゃねーぞ。だが外国でもねー……  
どういうことだ？」

「リボーンさん、それって……」

エステルがそう言い掛けた時、少し遠くの方で人の声が聞こえてきた。

何やら言い争っているようで、その声は三人の耳にも届いている。

三人はしばらく黙ると、やがてリボーンがニツと笑みを浮かべる。

「圭一の言った通りかもな。そんじゃ、行ってみるか」

リボーンの判断に従うように、圭一とエステルはその後ろを黙って歩いていった。

一方その頃、行方不明になったリボーンを探してランボの10年バズーカに当たり、10年後の世界に飛ばされたツナこと沢田綱吉。

(木のおい……？ それになんか暗い……)

ツナが目を覚ますと、そこは沢山の木々が生い茂る薄暗い森の中だった。

「もしかしてここ10年後……？ 未来の自分と入れ替わったってことは、10年後のオレがここにいたんだ……」

起き上がって辺りを見渡してみるが、やはり見覚えのない場所だ。

「ど、どこだろう……？」

ツナがこの森にやって来て、まもなく5分が経過しようとしている。

その間、ツナは何をしていたかというところ……

「なんでこんなことになったんだろ……リボンもないし……」

近くの木の傍に座り込み、あれこれと悩み続けていた。

しかしそれも無理はない。

いきなり見知らぬ場所に飛ばされ、ツナは訳も分からずに混乱している。

と、そんな時だった。

ツナの耳に聞き慣れた10年バズーカの爆発音が聞こえたと思うと、ツナの目の前にはつい先ほど10年前の世界で別れたはずの獄寺隼人が通販で購入した八つ橋の入ったビニール袋を持って立っていた。

「10代……目？」

「う、獄寺君!？」

まさか獄寺までもがここにやって来るなんて思ってもいなかったツナは、呆然とした表情で周囲を見渡す獄寺に叫んだ。

「あれ……? いつもの10代目だ! オレてっきり、10年後に来たかと思いましたよ」

「いや……ここは10年後で合ってるよ獄寺君。オレもさつき10年前から来たんだ」

明るい口調で喋る獄寺に対し、ツナは暗い口調で答える。

「なんだ！ やっぱりそうスカ！ リボンさんのことで大人ランボを呼ぼうとして10代目ん家行ったら窓から10年バズーカ飛んで来て当たっちまって……」

（同じことしてる……）

「しかしここ……どこなんスカね？」

そう言っつて獄寺は唐突に立ち上がり、自分たちのいる森の周囲を見渡す。

「日本じゃないっつてことも考えられますね」

「えっ……？ 外国……！？」

見ず知らずの場所に飛ばされ、途方に暮れるツナと獄寺。

「とりあえず、これからどうしましょうか？」

このままでは埒が開かない。

そう思っていた獄寺は、森の真ん中で静かに立ち尽くすツナに今後の判断を促す事に。

「う、うん。そうだね……5分して戻ったらまず……あれ？」

「？ どーしたんスか？」

ツナがそう言い掛けたところで突然止めた為、獄寺は疑問に思いツナに声を掛ける。

「もうとっくにここに来て5分くらい経ってるんじゃないかな……？」

「なっ。そういやあオレもこっち来てから5分は経った気がします」

そつ……ツナと獄寺はこの森に飛ばされてから既に5分近くが経過しようとしていたのだ。

「だよねえ！！ じゃあなんで過去に戻らないの？」

頭を抱えて獄寺に訊くツナ。

「考えられるのは……10年バズーカの故障じゃ……」

というより、それしかない。

そしてリボンが帰って来ない原因も……

少なくとも、獄寺はそう思っていた。

「そ、そんな〜！！ オレ達どーなっちゃうのー！？」

「詳しくは分かりませんが……二度と過去に戻れないとか……」

突然の事態に慌て始めるツナに、獄寺は焦りながらも冷静に言い聞かせる。

「えー！？ そんなの困るよ！！」

「いや……まだ決まった訳では……」

「どーしよう！！！」

と言ったところで、唐突にツナのお腹が鳴った。

あまりの恥ずかしさにツナの顔が赤くなる。

「とりあえず八つ橋、食べましょうか」

そんなツナを見て、獄寺は笑顔を浮かべながら予め持っていた八つ橋のビニール袋を取り出した。

「しかし今……どうなってんスカね？」

唐突に、獄寺が呟いた。

「えっ？ どういうこと？」

「いえ……リボンさんのことです。10年バズーカが故障したん

なら、リボンさんが帰って来ないのもオレ達と同じようにこの何処かにいるってことじゃないのかと……」

それが、この短時間に導き出した獄寺の答えだった。

「つて、ことは……」

「ええ！ リボンさんは絶対にこの森の何処かにいます！」

力強く頷き、獄寺はツナにはっきりと告げる。

(リボンが……いる！)

パキッ。

と、ツナが安堵したその時、背後から枝が折れたような物音が聞こえた。

「誰だ！！」

その音にいち早く気付いた獄寺は瞬時に振り返る。

「ははっ、気付いたようだな。まあ、かくれんぼって歳でもねえしな」

そう言って出てきたのは、鞘の部分に巻かれた紐で刀をぶら下げた黒髪の男。

「敵！？ 10代目、下がって下さい！ ここはオレが！！」

「獄寺君！」

突然現れた黒髪の男を敵と判断し、獄寺はツナの制止を無視して体の至る所に仕込んであるダイナマイトを取り出す。

「果てる！」

通称『二倍ボム』と呼ばれるその技は、森の木々を爆破して傷付けながら黒髪の男に向かっていく。

「効かねえな、つと」

しかし黒髪の男は身軽な仕草でダイナマイトを回避。

「逃がすかよ！ ロケットボム！」

舌打ちし、獄寺は手に持ったダイナマイトを一斉に飛ばす。

「やれやれ、オレは戦いに来たんじゃないかねえんだけどな」

頭を掻きつつ刀を抜刀をし、無数に飛んで来るダイナマイトの導火線を斬り捨てる。

「なっ………！？ てめえ………そんなの信用できっかよ！」

「聞く耳持たないってか？ けどまあ、嫌いじゃねえぜ？ そっぴのうの」

言って、黒髪の男は獄寺に一瞬で接近する。

「幻狼斬！」

黒髪の男は瞬時に獄寺を切り裂くと同時に背後に回り込み、獄寺を横薙に斬り払う。

「獄寺君！」

「さて、と……最後に確認しときたいことがあんだけどよ」

獄寺を倒した黒髪の男は、次にツナを視界に捉える。

「確認したいことだと……？」

「な、何言ってるんだ……？」

男の言葉に、獄寺とツナは理解できずにいた。

「10代目！ こいつ何かやばいっス！！ に……逃げて下さい！」

「獄寺君！！ そんな！」

獄寺の言葉にツナは戸惑う。

（本当は……こんな絶対飲みたくなかったけど……）

ツナが取り出したのは、飛ばされる直前にバジルから貰った死ぬ気丸の入った小瓶だ。

（あーもー！ やるしかー！）

ダメ元で死ぬ気丸を飲み込む。

するとツナの額からオレンジ色の炎が灯り、ツナを纏う雰囲気も変化する。

超死ぬ気モードだ。

「いいねえ。がきんちょにしちゃ上出来だ」

ツナの身に突然起きた変化に、黒髪の男はニヤリと笑う。

「……何故、オレ達を狙う」

Xグロブによる推進力を活かした高速パンチを繰り出しつつ、ツナは好戦的な男に疑問をぶつける。

「ああ、ほとんど趣味だ。悪いな」

だが、男の口から返ってきたのは意外な言葉だった。

「何？」

それがツナの動きを遅らせ、黒髪の男は易々とツナのパンチを片手で受け止める。

「まあ、とにかく気に入ったよ。なあ、オレたちも一緒に行動していいか？」

そう言って刀を納めつつ、黒髪の男はツナと向き合う。

「他にも……誰がいるの？」

目の前の男を敵じゃないと判断し、超死ぬ気モードを解いたツナが訊ねる。

「ああ。って訳だし、出て来たらどうだ？」

男が背後の茂みへと声を掛ける。

「……はじめまして。魂魄妖夢です」

自己紹介と共にツナ達の前に現れたのは、二本の刀を帯刀した少女魂魄妖夢だった。

1話『森での遭遇』（後書き）

さて、今回は森での出会いでした。

ユーリの性格が『らしい』か不安ですが、そこは大目に見てください。

次回は一旦別キャラの視点になる予定です。

## 2話『少女が見た楽園の景色』（前書き）

今回のあらすじ

無人島で目覚めた海馬瀬人と東風谷早苗は、嵐を呼ぶ幼稚園児こと野原しんのすけと出会う。

初対面ながらも3人は共に憧れる『正義の味方』の話題で盛り上がりを見せる。

その一方、キヨンとハルヒは道中に発見した木製作りの小屋で日記と思われる小汚い手帳を手に入れる。

しかしその時、思いがけぬ来客が小屋にやって来て……？

注意！ この小説では社長こと海馬瀬人が大変なキャラ崩壊をしていきます。

社長のイメージを壊したくない方はスルー推奨です。

## 2話『少女が見た楽園の景色』

エジプトでのファラオの記憶を巡る戦いを終えた遊戯達は、後に控えた『闘いの儀』に向けて準備を始めようとしていた。

そして目的地に向かう船のデッキで、二人のデュエリストが対峙していた。

「来たな、遊戯……いや、アテム！」

腰まであるマントのような形状をした白いコートを羽織った男は、目の前で仁王立ちする奇抜な髪型をした青い学ラン姿の男に喋り掛ける。

「海馬……どうやら長きに渡る俺達の宿命の戦いにも決着を着ける時が来たようだぜ」

「ふうん。邪魔ばかりするうるさい外野も今回はいない……そうだ、オレはこの瞬間を待っていた！ 遊戯、オレが唯一！ 生涯のライバルと認めた誇り高きデュエリストよ！ オレの目指す栄光のロードにおいて、オレが乗り越えねばならん障壁！ それが貴様だ、遊戯！」

遊戯を指差し、海馬は自らの想いを叫ぶ。

「さあ、カードという名の剣を取れ！ 遊戯！ これがオレと貴様の……古来より続く宿命のデュエルの最終章だ！」

そう言つて、海馬は腕に装着した腕輪状の鉄板『デュエルディスク』を起動させる。

「ああ。いくぜ、海馬！」

「『デュエル！』」

と、二人がデュエルの開始を宣言した時だった。

「ぬう、なんだこの光は……？」

「くっ、この感じはあの時の……！？」

二人を包み込むように、突如として発生した謎の閃光が輝きを放つ。

「『うわあああッ！』」

海馬と遊戯は眩い閃光に包まれ、船の上から姿を消した。

「ふうん。やはりここは異世界のようだな」

そう言つて森の中を歩く白いコートの男 海馬瀬人。

海馬は今より少し前に目覚め、最初こそ突然の事態に困惑していたものの、しばらく考えた上で冷静に自分が異世界に飛ばされたのだと判断を下した。

海馬は以前にもデュエルモンスターの世界や古代エジプトの世界に飛ばされた事がある。

そしてそういつ時は必ず、決まって何か起きてからだった。

そう……恐らくは遊戯と自分を包み込んだあの眩い閃光。

あれこそが異世界に飛ばされた原因だと海馬は判断した。

「この地には人はいないと思っていたが……そうでもないらしい」

事実、海馬の前には巫女服を着た緑髪の少女が現れた。

「あの、あなたは……？」

少女はこの島に来て最初に出会ったのが奇妙な格好をしたイタい男（海馬）だった為、目の前の男に対する恐怖感が顔にはつきりと表れていた。

「ふうん。人に名乗る時はまず自分からと教わらなかったか？ 小娘」

「むっ……東風谷早苗です。それで、良かったら名前を教えてくださいますか？」

海馬の偉そうな態度に若干の皮肉を込め、早苗はムツとした顔で海馬に聞き返す。

「ふうん。オレは海馬瀬人！ この地上で最強のデュエリストだ」

と、海馬は相変わらずの態度で早苗に告げる。

「デュエリスト……ってなんですか？」

「デュエルモンスターズを知らんだと!？」

しかし早苗の口から出た予想外の言葉に、海馬はショックを受けた。

全世界で流行しているカードゲーム、デュエルモンスターズ。

デュエルの大会はテレビ中継もされているし、女性がアメリカチャップルになるなど、男女問わず世界中で人気がある。

やった事はなくとも、知らないというのはとても信じられなかった。

「知らないのか。デュエリストとは、デュエルモンスターズのカードを使ってデュエルする者のことを言う」

海馬は仕方ないとばかりに、早苗にデュエルモンスターズについて教える。

「えーと……ごめんなさい。知らないです」

「何……? まさか、それすらも知らないとは……」

だがそこで、海馬はこの場所が異世界だという事を思い出す。

ならば知らないのも無理はない。

海馬はそう判断した。

「私は今、幻想郷という所に住んでいるので、最近の外の世界のこととは知らないんです」

「幻想郷……だと？」

そして今度は、海馬が幻想郷について教わる番だった。

「幻想郷、か。オカルト地味ではいるが、なるほど……貴様のそのコスプレも理に適っている」

早苗から幻想郷についての情報がある程度聞いた海馬は、改めて早苗の巫女服を見定める。

「コ、コスプレじゃありませんよ！ 私はれっきとした守矢神社の巫女です！」

「ふうん。喚くな小娘」

顔を真っ赤にして反論する早苗に、海馬は愉快げな笑みを見せる。

「だ、誰のせいだと思っているんですか！？」

と、早苗が海馬に突っかかりそうな勢いで言い返そうとした時、二人がいる場所の近くから幼い子供の声が聞こえてきた。

「うーん……？ 何やら外が騒がしいですなあ」

寝ぼけ眼を擦りながらむくりと起き上がったのは、赤いシャツに黄色い半ズボン姿の幼稚園児だった。

その隣には、綿飴のようにふわふわした白い毛並みを持つ小型犬もいる。

「男の子……？ こんなところにどうして……」

「ほう……小娘の他にも子供がいたか。となると、オレの他にもまだいそうだな……」

その子供を見て、早苗と海馬はそれぞれ思考を巡らす。

「おお、変な格好のおじさん。あんた誰？」

指差しつつ真っ先に口に出したのは、海馬が着ている白いコートの奇抜さであった。

「き、貴様……オレはおじさんではない！ オレは海馬瀬人だ！  
そしてこの格好は」

海馬が声を上げて言い掛けるが、既にその子供の対象は海馬の隣にいた早苗へと向けられていた。

「おっ！ ねえねえそこのお姉さ〜ん、オラとお茶しな〜い？」

早苗の容姿を瞬時に見定め、合格と認めた子供は初対面の早苗に対

していきなり口説き始める。

「えっ……？ わ、私とですか？」

「ぐっ……人の話を聞けえ！」

遂に我慢の限界か、海馬の怒りの声が響いた。

現在、海馬と早苗は異世界の無人島で偶然出会った幼い幼稚園児と自己紹介を交わしていた。

「オラ、野原しんのすけ！ 5歳！ 好きな食べ物は納豆ごはんとかマグロのお刺身。よろしくだゾ」

「ふうん。オレは海馬瀬人だ」

「お、大人びた子供ですね……私は東風谷早苗です」

一通り挨拶を終えると、しんのすけは納得したように頷く。

「ほうほう。海馬おじさんにさえちゃんだね。うん、ちゃんと覚えてたゾ」

「どこがだ（ですか）ー！！」

海馬はともかくとして早苗は名乗ったばかりで名前を間違えられて

しまい、二人は息もピッタリにしんのすけに突っ込む。

「じゃがいも小僧、おじさんではないと言ったはずだ！ それに、こう見えてオレは17だ。せめてお兄さんか兄様と呼べ」

「だいたい、『さえちゃん』って誰ですか！？ もうそれ完全に別人ですよね！？ 私の名前はさ・な・え！ 早苗です！！」

二人から一遍に反論され、しんのすけは難しそうに頭を抱えてしまふ。

「おおぅ……？ オラ、いっぺんに言われても分からないぞ……」

「ぐっ……ならば仕方ない。社長と呼べ」

仕方ないとばかりに、海馬はしんのすけに言う。

「しゃちょーさんですか？ 分かったゾ。ところで、しゃちょーさんは何のしゃちょーさんなの？」

「ふん、オレは日本とアメリカにあるゲーム専門の大企業『海馬コーポレーション』の社長だ。今は世界海馬ランド計画を実現する為、アメリカの海馬コーポレーションで働いている」

と、海馬は自信満々にしんのすけに告げる。

「あの、こう言うっては失礼かもしれませんが……とても17とは思えないです……」

とここで、話を聞いていた早苗がおずおずと口を開く。

「ふうん。よく言われる」

「ええ！？ よく言われるんですか！？」

と、早苗は啞然とした表情で海馬に的確な突っ込みを入れる。

「おお〜！ 二人とも漫才上手だね。まるでお笑いの師匠たちみたいだゾ」

「誰がお笑い芸人だ（ですか）！！」

しんのすけのマイペースな発言に、またもや息ピッタリに反論する二人。

「おお〜、二人ともノリいいね。やっぱり二人は漫才師だゾ」

「違う！ それにオレはどちらかと言えば、そう……正義の味方カイバーマンだ！！」

「ええ〜！？ しゃちょーさんって正義の味方なの〜！？」

海馬が正義の味方という事に、愕然とした表情で海馬を見上げるしんのすけ。

「ふうん。カイバーマンというデュエルモンスターの宣伝ヒーローのふつুকしい衣装を発案したのがこのオレだ」

しんのすけの反応に気分を良くしたのか、海馬は満足げに言った。

「おお、なんか凄いね。だけどオラもこう見えて実は春日部をお守りする正義の味方なんだゾ！ えっへん！」

「ふうん。だが、所詮は子供の遊び。片腹痛いわ」

「駄目ですよ海馬さん。相手はまだ子供なんですから、そんな夢を壊すような事言っちゃ……」

と、早苗は海馬に咎めるような視線を送る。

「それにかっこいいじゃないですか、正義の味方！ 私、幻想郷に引越す前からずっとそういうのに憧れてたんです！」

早苗は子供のように目を輝かせ、夢見るような表情で熱く語る。

「おお！ じゃあ3人でアクション仮面ごっこしようよ！」

ヒーローというものが意外と二人に好評だった事を嬉しく思ったのか、しんのすけは海馬と早苗に笑顔で提案する。

「待て小僧。何故そのような話になった」

いきなりの話に、海馬も待ったを出す。

しかし……

「じゃあ、オラがアクション仮面やるから、しゃちよーさんがブラツクメケメケ団に操られて悪い奴になった元正義の味方のカイバーマン役。で、さえちゃんはカイバーマンに人質として捕まったヒロインの桜ミニミニちゃん役だゾ」

そのように配役が決まったところで、しんのすけは即席で考え付いたストーリーの展開をペラペラと語り出す。

しかしその一方で、しんのすけのマイペースさに付いて来れない者達もいる。

「ああ……やっぱり私はさえちゃんなんだ……はあ、なんかもう疲れちゃったし、このままさえちゃんでもいいです……」

自分が相変わらず『さえちゃん』と呼ばれている事に軽く落胆しながら、早苗は溜息混じりに肩を落とす。

「いい加減にしろお！　そして貴様ら、人の話を聞けえ！」

そして海馬は二人から無視されている事に怒り、本日二度目の叫びが響くのだった。

海馬と早苗がしんのすけとシロと出会っていた頃、海岸から森の奥へと進むハルヒとキヨンは途中で木製作りの小屋を発見していた。

「館……はなさそうだが、小屋はあったな」

既に廃棄された小屋の入り口付近を観察しながら、キヨンは隣に立つハルヒに話し掛ける。

「……まあいいわ。とりあえず入りましょ」

ハルヒはこの小屋に何か思う事があるのか、堂々たる足取りで小屋の中に入っていく。

「しかし、中もボロいな……」

キヨンは室内の様子を観察しつつ、素直な感想を述べる。

「ちよつとキヨン！ 見て見て！ こんな発見したわよ！」

一方ハルヒは奥の部屋から何かを発見したのか、興奮した様子でキヨンの下に走ってきた。

「やれやれ。ハルヒの奴、今度は何を見つけたんだ……？」

と、キヨンが失笑しつつ振り返ってみると、ハルヒは黒色の小汚い手帳をキヨンの眼前にズイツと見せ付けてきた。

「これは……日記か？」

キヨンは荒れた部屋の椅子に適当に腰掛け、ハルヒから手渡された手帳をペラペラと捲ってみる。

「どう！？ 何か重要なこと分かった！？ ひよつとしたら宝物の在処へのヒントが記されているかもしれないわよ！」

そんな馬鹿な……と内心呟きながらキヨンは手帳に記された日記を読み始める。

……と、その時だった。

「貴方達……そこで何をしているのかしら？」

「えっ……？ メイド、さん……？」

開かれたドアの前に、メイド服を着た銀髪の少女がナイフを片手に立っていた。

そしてそのメイドの後ろに隠れるように、小さな犬を両手で抱き抱えた際どい格好の少女が顔を少しだけ覗かせている。

「質問しているのはこっちよ。それで？ 貴方達はこの小屋の持ち主？ それとも……」

メイド服の少女はキョンの手にある黒い手帳に視線を送る。

「二人仲良く無人島でお宝探し……と、言ったところかしら？」

言って、メイド少女は不敵な笑みを浮かべた。

## 2話『少女が見た楽園の景色』（後書き）

今回は一応、補足説明です。

海馬はカイバーマンの衣装などを、遊戯王DMのエジプト編終了時にはある程度決めていたという設定です。

また、この小説の早苗も実は正義の味方に憧れていたという設定です。

話が進むにつれ、他にもこういったキャラが出るかと思いますが、ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3136y/>

---

パラダイス・ロスト

2011年11月11日20時55分発行